

さへ罷出候はゞ、御直に被仰度儀有之旨被仰出候。徳大寺殿被承之、落涙のみにてとかくの御請は無之候。重て罷出候様にとの御事にて、御前へ伺候有之候。昨夜の諫言尤の至に思召候。但御過言の御誤御恥敷思召候。御大酒の事、以來すきと御止可被遊候。昨夜の御歎は則書の御歎にて候。唯今徳大寺へ被下候由にて、御直に被下候。今以て徳大寺殿に其歎有之由。此儀も雷鳴同事に、すきと御過酒御止被遊候。

一、程朱の學に、專御志深く候て被仰候は、吾國にて近世儒學發興、誰彼名ある者も多く候へ共、程朱の學を取立申候は、明壽院惺窩が力に相極候。左候へば其功可稱儀に思召候間、惺窩文集に御制の序可被加の旨にて、則御撰述被遊、文集に被添、御文庫に納申候。

一、天下武家の制法に罷成候上は、不及是非事といへども、衣服の制餘りに見苦敷事に思召候。天下の萬國おびたゞしき内、何れの夷狄にか、袖袂のなき衣服着用申處有之や。吾國の布上下と云ものは袖なく候。着用仕候事至てにくむべき儀に思召候。衣冠の事は武士とても相應に、昔へ歸候

様に、近日關東へ可有御下知と被仰候内、御痘瘡にて終に崩御にて御座候。

一、都に聖廟の斷絶仕候儀は、近代の事に候。聖廟さへ有之候へば、大學寮も相副申儀に候。何より急切の事に思召候旨にて、此儀は關東へも被仰遣、段々御用意有之、近々御造營の筈に候處、是以御痘瘡にて相止申候。

一、惣御人となり、常人の御様子にては無之候。御前へさへ罷出候へば、其まゝ感服仕候。譬佛法並和歌など御嫌被成候儀、且又程朱の學御崇敬の儀、別而堂上にて珍敷事に人々被申合、老成の衆は殊に不可然事とて、心服不被仕候。

夫故舊例、故實を引て、諫言も可申上と心懸被罷出候衆、御前にてはすきと申出候事をも自然と打忘れ、勅諭の趣をひたすら甘心仕候て退被申候。大に人の感化仕候所有之御德容の由に候。

一、右の御様子ども密に關東へ相聞え、御沙汰不宜候。其上御三家様の内へ、潛に御通路の品も有之候由。御痘瘡御大切に被爲成候旨披露有之候處、關東より醫師參上、天脉も伺申候。其御藥を堅被召上間敷由、數度勅諭候得共、時

の所司代<sup>土井大次頭</sup> 爽て被召上可然旨執奏有之候て、被召上無間崩御被遊候。京中の貴賤歎悲候事不大形候。

一、崩御の後於泉涌寺御火葬の筈に相極申候。御平生御志

の合申候公卿徳大寺殿・三條殿・小倉殿三人は、御殯所へ被

出候事も、何方より誰申ともなく、遠慮有之様に御沙汰有之

被指扣候。それゆゑ御葬禮の儀など、一向頗着も不被申上

候。常々御看の御用相勤候魚屋の八兵衛と申をと、御火

葬の事を深く嘆き、下々にてさへも平生の志をば、死後に

も相立候様に仕ものに候。儒學御好不被遊候てさへ、玉體

を火化仕事無勿躬事に候。我等一身を捨候て、此御火葬の

事は相止候様に可仕とて、日夜仙洞・女院御所などをはじ

めかけまはり、且又泉涌寺出家衆へ申談、心力を盡候て申

ありき候。理窟迄にても無之、痘瘡にて相果候ものは、下

賤の者さへも火葬に不仕候。此無御聞届御火葬被成候は

ゞ、以後國家の御爲不吉の事ども可有之など、種々の儀を申ありき候。其趣こゝかしこより仙洞へも相達、泉涌寺よりも奏聞有之候て、御火葬の儀は相止申候。八兵衛事誠に天下の奇男子と可申候。

此御遺事は禮幹在京の日、菅眞靜・齋藤善内の二人の話にて書留置申候。帝の詩作並惺窩文集御製序も、寫取候て別卷に有之候。

一、鹿島社へ鳳凰來儀

先夜白石老人物語に候。先年常陸の鹿嶋社へ、鳳凰來儀と申事有之候。其様子承候所に、一夕夜深てさわくと社も鳴動仕候て、しばらくあつて何かは不分明に候へ共、廣庭の中ひしと寶珠のごとく成物鋪候て、光かゞやき申候。稍あつての申と見え、又最前のごとく鳴動有て、右の珠一所により候様に見え候て飛去申候。怪異の儀と社人ども驚候て、鳳凰など、申儀は存も不寄、翌日託宣をあげ候處に、神託に夜前鳳凰來賓、うれしく被思召との儀に候。私など孔雀の様成物と迄心得罷在候。おびたゞしき軀の物と見え申候。是に付て存候へば、聖人の禮樂等の事も、中々常人のおしさり候とは、格別耳目を驚かし申儀るべきと存候。聖德に感じ候て來儀の鳥に候へば、さぞ場を取候て見事成物たるべく候。是にて凡聖人の代の文物赫々大成事おしはかり候て、右のはなし感心仕候間申進候。正德二年五月六日先生御手紙